

# ● 第9回 大阪国際室内楽 コンクール&フェスタ

小味 渕 彦 之

大阪国際室内楽コンクール&フェスタは日本室内楽振興財団の主催により、1993年を初回として3年ごとに開かれてきた。9回目となる今回は5月13日から21日まで9日間にわたって、これまでの8回と同様にいずみホール（大阪市中央区）を会場として開催された。

コンクール第1部門は弦楽四重奏、第2部門はピアノ三重奏もしくは四重奏と、管楽アンサンブルが隔回で開催され、今回は管楽アンサンブルが対象になる。なお第2部門は木管五重奏、サクソフォン四重奏、金管五重奏のいずれかで、3つの異なる編成が同列に審査される。コンクール審査委員長は両部門を通してチェリストの堤剛が務めた。第1部門の副審査委員長は元・東京クワルテット第1ヴァイオリン奏者のマーティン・ビーヴァーで、他に5人の審査員。第2部門の副審査委員長はクラリネット奏者のミシェル・ルティエで、他に5人の審査員が審査にあたった。今回初めての試みとして、出演団体による事前の会場におけるサウンドチェックが行われた。1団体10分と短時間ではあったが、有意義なものになったようだ。

第1部門には21団体の応募があり、予備審査の結果、8団体の参加が決まったが、1団体がコンクール開催前にキャンセルとなり、7団体が1次予選に挑んだ。今回から3次予選が設けられ、1～3次予選と本選の4段階で審査が行われた。1次予選はすべての団体が通過し、2次予選からそれぞれの団体の本領が発揮された印象を得た。2次予選通過は5団体であった。さらに、自由選択曲と西村朗《弦楽四重奏曲「シェーシャ」》(2013年作曲)が課された3次予選で、本選への出演が3団体に絞られた。同部門はこれまで8回の歴史を重ねる中で、世界でも最も重要な弦楽四重奏のコンクールの一つに成長している。今回はこれまでも増して、非常に高いレベルの演奏が繰り広げられたが、アメリカの団体の活躍が目立ったことが特徴として挙げられる。本選はベートーヴェン《弦楽四重奏曲第12～15番》、もしくはシューベルト《弦楽四重奏曲第15番》の中からいずれか1曲を演奏する。残った3団体は、すべてがアメリカの団体であった。審査結果は1位がアイズリ・クアルテット、2位がユリシーズ・クアルテット、3位がヴィアノ・ストリング・クアルテット。なおアイズリQの4人のメンバーの内、2人は日本人で、団体名は日本の浮世絵様式の一つである「藍擦絵(あいずりえ)」に由来している。

第2部門には71団体の応募があり、予備審査の結果、10団体の参加が決まったが、1団体がコンクール開催前にキャンセルとなり、9団体が1次予選に挑んだ。木管五重奏が2団体、サクソフォン四重奏が4団体、金管五重奏が3団体である。1、2次予選と本選の3段階で審査が行われた。管楽アンサンブルは第7回以来6年ぶりの開催。1次予選は6団体が通過し、木管五重奏が1団体、サクソフォン四重奏が3団体、金管五重奏が2団体という内訳。2次予選で4団体に絞り込まれ、その内訳は木管五重奏が1団体、サクソフォン四重奏が2団体、金管

五重奏が1団体であった。同じ管楽器とはいえ、違う編成を同列に審査するのは至難であっただろう。結果はサクソフォン四重奏のクワチュオール・ザイール（フランス）が1位、同じくニオベ・サクソフォン四重奏団（フランス）が2位、木管五重奏のクンスト・クインテット（ドイツ）と金管五重奏のパリ・ローカル金管五重奏団（フランス）が3位である。部門全体としてサクソフォン四重奏のレベルの高さが目立つものであった。

フェスタはこのコンクールを特徴づける部門である。世界的ヴァイオリン奏者だった故ユーディー・メニューインの提唱で初回から開催されてきた。応募資格は2名から6名のアンサンブルというだけで、年齢制限はなく、楽器編成もほぼ自由だがボーカルは対象外。32カ国から147団体の応募があったところを、11カ国18団体が予備審査で選ばれて出場した。

フェスタは従来通りボランティアによる一般審査員を募集して、大きな審査権限を持たせている。今回から出場順が後の方が有利となる傾向を防ぐために審査方法が見直された。2日間の予選の各日ごとに3団体の本選出場を選出し、本選は2団体ごとに審査して、勝ち抜いた3団体で優勝が競われる。審査委員長は前回まで担ってきた日下部吉彦が勇退し、副審査委員長を務めてきたピアニストの梅本俊和が審査委員長、新たにトロンボーン奏者の呉信一が副審査委員長を務めた。一般審査員は予選Aが110名、予選Bが103名、本選が129名。

最高位のメニューイン金賞はバヤンとドムラという民族楽器を奏でたデュオ・プロコピエフ・ダフチャン（ロシア）で、フォクロア特別賞も受賞。ロシアの民族楽器による団体が強いというこれまでの傾向を踏襲する結果になった。銀賞はマリンバとピアノのデュオ・フュナンビュル（フランス）。自作曲、既存作品の編成を問うことなく、彼らの演奏は高度な演奏レベルを誇り、人気を博した。銅賞はピアノ、チェロ、クラリネットのトリオ・エクリプス（スイス）。この編成のために書かれたベートーヴェンやブラームスの名曲を、真つ勝負で奏でたのが評価されたとと言える。

前回好評だった、ライブ・ストリーミングによるインターネット配信は、今回YouTubeを利用して、すべての部門の演奏と披露演奏会を含めて実施された。大会終了後もアーカイブとして残され、視聴することができる（チャンネル名：osaka chambermusic、2018年2月現在）。